

山口県近世社寺建築の調査

建造物研究室

昨年度の岡山県に引き続き今年度は九州芸術工科大学・九州産業大学と共同で山口県の調査を行なった。県下56市町村のすべてから予備調査表の提出がありその数は1377件3205棟に達した。その内調査員が実査（第1次調査）したものは298件652棟で、さらに平面実測をとまなう精査対象（第2次調査）にあげたものは、神社117棟、寺院104棟である。調査の分担は九州班が日本海側を当研究所班が瀬戸内側を受持った。今回報告する研究所班の調査地は下関市から岩国市までの36市町村で県下のはほぼ3分の2を占め宇部市以西は長門、以東は周防に属する。

神社建築 県下の神社建築では住吉神社本殿（下関市・1370）や今八幡宮本殿（山口市・1504）など6件10棟の中世建築が既に国指定になっている。今回の調査ではこれらに続く中世末ないしは近世初頭の社殿の存在が期待されたが、結果は鰐鳴神社本殿（山口市・1686）が最古で、以下岩隈神社本殿（玖珂町・1691）志多里神社本殿・拝殿（山口市・1693）などかろうじて17世紀に入るものが7棟あるのみで、その他はすべて18世紀以降の建立になり、その間百年余の空白があることがわかった。二次調査をおこなった神社本殿39棟の形式・年代別を表にあげる。このうち入母屋造はもと大内氏ゆかりの興隆寺東照宮であったという築山神社（山口市・1742）ただ1棟のみで、あとは流れ造またはその系列に属するものであるからあきらかに流れ造の独占する地域であるといえる。中世には流れ造のほかに春日造（石城神社・1469）や入母屋造（古熊神社・1547）が混在するのとやや趣を異にしている。拝殿は今八幡宮にみられる一間楼門の両側に翼廊をともなった形式のものが各年代を通じて遺存し、しかもそれが長門にはなく周防に限られることは特徴的である。嘉川神社（山口市・1694）が最も古いのが、総じて全体に木太く、かつ斗栱は六支掛の制をふむなど正規の造りよりなっていて実年代よりも古式にみえる。この形式の拝殿に限り中世の木割りがあまりくずれることなく後世にまで伝承されたともいえよう。これ以外の拝殿は、桁行3間・梁間2間で前後に梁を架け、内部の外周を化粧屋根裏として中央部に天井を張るのが一般的標準型である。

寺院建築 県下の寺院を宗派別にみると、その7割近くが浄土真宗で、残りを浄土宗、禅宗系、密教系などで分っている。数少ない密教系寺院では清水寺本堂（山口市・1493）や正法寺本堂（山陽町・16世紀）はともに五間堂で後の改造は大きいがあきらかに中世の建築である。県下唯一の七間堂として国分寺金堂（防府市・1780）がある。年代は古いとはいえないが奈良時代からの寺地に位置し、往時の五間四面堂の面影を残す堂々たる建物で、仁王門（1767）とともに威容を誇っている。三間堂は本堂に付属するお堂に多く、宝形造や入母屋造の形になる。福楽寺観音堂（柳井市）は寛永12年と伝え改造は多いが県下に数少ない近世初頭の建物として貴重

山口県近世社寺建築の調査

な存在である。禅宗系寺院の多くは中世以来の伽藍を伝え、国指定仏堂はほぼこれらの寺院に含まれるが、未指定の中では巧山寺総門（下関市）が古い。棟木まで延びる親柱をもつ四脚門でおそらく仏殿と同時期までさかのぼり得よう。禅宗様式になる仏堂では覚苑寺本堂（下関市・18世紀中）漢陽寺法堂（鹿野町・18世紀中）高山寺仏殿（柳井市・18世紀末）などがある。いずれも年代が降るだけに純粋性を保ち得ず部分的に和様の介入を許しているのはやむを得ないことであろう。方丈系本堂では徳巖寺本堂（徳山市・1684）と乗福寺本堂（山口市・1691）が17世紀に入る。ともに柱の数が多く古式を残す点では共通性がある。禅昌寺（山口市）は文政の大火で伽藍を失ない現在のものはその後の再建になるが、境内の雰囲気は禅宗寺院独特のものをもつ。浄土宗と真宗本堂は18世紀以降のものより残ってはずで定形化された形を示している。ただ、18世紀後半の明和・安永になっての建立例が急増し、その限られた年代と形式内においてより大型により精巧にという意図がうかがえる作品も多い。仏堂の他には門・鎮守堂・厨子などがある。門では秦雲寺（山口市・室町末・四脚門）笑山寺（下関市・17世紀初・四脚門）が、鎮守堂では清水寺（山口市・1566・一間社流造）正法寺（山陽町・17世紀末・一間社流造）、厨子では純粋な禅宗様式の法泉寺（宇部市・1530）が中世あるいは近世初頭のものとして遺存する。

中世、山口を中心にして中国地方を支配していた大内氏は、その文化政策の一環として各地に社寺を造立した。そのうち現在遺存するものほとんどは既に国指定の重要文化財となっている。今回の調査はこれら大内時代の遺構の発見を含めて、そのあとを襲った毛利時代の社寺建築の動向を追求することにあつた。今回前者の目的はある程度満たされたものの、標題の近世社寺建築については特に藩制初期の遺構が極端に少ないこともあって十分にその流れをつきとめるには至らなかった。しかし、18世紀に入ると社寺の造営活動は活潑になるとともにその遺存例が増し、18世紀の末に最盛期を形成するという過程をとらえることができた。その理由としては、やはり毛利藩が関ヶ原の敗戦後、防長二州にとどめられたことに起因するとみるのが妥当であろう。そしてその後の瀬戸内沿岸の新田開発・産業の振興などの施策が実をあげ経済的な余裕がきざすとともに社寺に対する関心も再認識されてきたものと思われる。

なお近々に調査結果の報告書が刊行される予定である。

（組見 啓三）